

那 霸 市 内 遺 跡 VII

—首里旧金城村跡—

—御茶屋御殿跡—



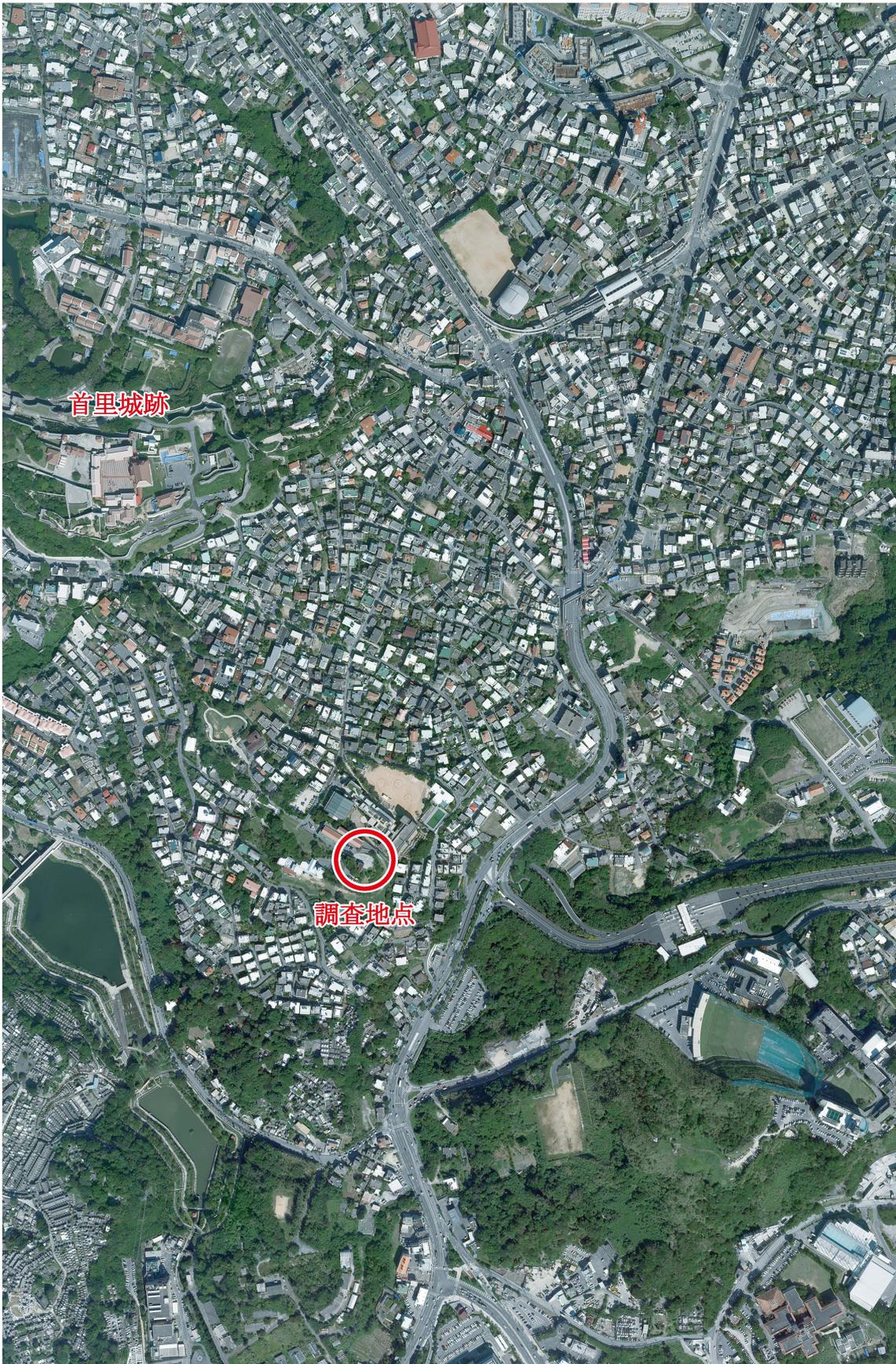
巻首図版 1 首里旧金城村跡周辺の空中写真

○内は調査地

(2009年撮影)



巻首図版2 上段：首里旧金城村跡の遠景（南側より）
下段：遺構の完掘状況



巻首図版3 御茶屋御殿跡周辺の空中写真

(2009年撮影 S=1/8,000)



巻首図版4 御茶屋御殿跡の石積状況
上：写真撮影による石積B面の状況記録
下：レーザー測量による石積B面の状況記録

序

本書は、2006(平成 18)年度に実施した首里金城地区における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査、および2016(平成 28)年度に実施した御茶屋御殿跡における測量調査の成果報告書です。

首里金城地区は琉球王国時代には金城村と呼称されており、現在も数多くの井戸が確認できることから、豊富な湧水に恵まれた地域です。地区内には世界遺産の一つである玉陵や県指定文化財である首里金城町石畳道が残され、琉球王国時代の面影が現在においても感じられる地域でもあります。今回、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の結果、14～16世紀にさかのぼる集落跡の一部が確認されました。

御茶屋御殿跡は、那覇市首里崎山町にあったとされる旧王家の別邸跡です。戦災により焼失して、現在では茶亭跡南側の石積のみ残っていると伝えられております。今回、石積の測量調査をおこない、石積の現状把握をおこないました。

近年、開発行為をおこなう際には埋蔵文化財の確認とその後の協議が必要である事が周知され、市民の皆様のご理解のもと、文化財保護法に則した手続きが行われるようになりました。今回も関係者の文化財保護に対する御理解・御協力があつて文化財調査をおこなう事が可能となりました。

文化財調査報告書は現状保存できなかった遺跡の内容を示す唯一の記録刊行物となります。この文化財報告書が市民の皆様はもとより、多くの方々に活用されることを切望致します。

末尾ながら、このたびの調査に格別の御理解と御協力を賜りました宗教法人カトリック沖縄教区、宗教法人首里カトリック教会、学校法人カトリック学園首里カトリック幼稚園、発掘調査および資料整理にあたり御指導・御助言を賜りました方々、ならびに事業の実施にあたり御協力を賜りました関係各位の皆様は厚く感謝申し上げます。

2018(平成 30)年2月

那覇市長 城間 幹子

例 言

1. 本報告書は、那覇市市民文化部文化財課が国・県の補助を受けて2006（平成18）年度に実施した個人住宅建設に伴う「首里旧金城村跡」の緊急発掘調査、2016（平成28）年度に実施した現況把握を目的とした「御茶屋御殿跡」の調査成果を収録したものである。
2. 巻首図版1、3は国土地理院発行の空中写真（2009年11月6日撮影）のものを複製して使用した。
3. 巻首図版4は株式会社琉球サーベイが撮影した写真およびレーザー測量の成果物を、再構成したものである。
4. 「首里旧金城村跡」第3・4図および「御茶屋御殿跡」第3・4図に使用した図は、沖縄県立図書館東恩納文庫所蔵「首里古地図」を複写して使用した。なお掲載・利用にあたり、沖縄県立図書館資料班に多大な御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

「首里旧金城村跡」

5. 第2図の那覇市全図は国土地理院のものを複製して使用した。
6. 第5・6図は、那覇市現況図（平成7年12月修正）を加筆・編集したものを使用した。
7. 遺物実測図の番号と写真図版の遺物番号は一致するように配置してある。
8. 本稿の執筆は、玉城が行った。図版・表作成にあたっては高嶺昌也の協力を得た。
9. 出土遺物および図面・写真記録などは、那覇市市民文化部文化財課で保管している。

「御茶屋御殿跡」

10. 調査において、宗教法人カトリック沖縄教区、宗教法人首里カトリック教会ならびに学校法人カトリック学園首里カトリック幼稚園の関係者、保護者および周辺地域の皆様には、多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
11. 現地調査は、那覇市市民文化部文化財課の監督のもと、調査業務委託契約した株式会社琉球サーベイが調査現場での測量・写真撮影などの調査作業に伴う業務をおこなった。
12. 資料整理は下記のメンバーに協力・助言頂いた。記して感謝申し上げます。
真栄城和美・石原愛子・田川恵美
13. 第1図に使用した図は、坂本幸雄 株式会社 ティービーエス・ブリタニカ 『ブリタニカ国際地図』1991年7月1日（第2版改訂発行）の91頁部分をトレースして使用した。
14. 第2図の那覇市全図（S=1：25,000 平成22年11月1日発行）は国土地理院発行のものを複製して使用した。また近世の海拔ラインは、那覇市企画文化振興課1985『那覇市史通史篇第1巻 前近代史』、新島奈津子2005「古琉球における那覇港湾機能 - 国の港としての那覇港 -」『専修史学』第39号、那覇市市民防災室2014『那覇市防災マップ』を参考に、市文化財課専門員・学芸員の踏査結果を踏まえて作成したものである。
15. 第5～9図に使用した図は、平成28年度御茶屋御殿跡測量・図面作成業務委託として株式会社琉球サーベイに委託し作成した図面を基に、加筆・編集したものをを使用した。なお図に記した座標系の数値は、世界測地系である。
16. 第V章は、株式会社琉球サーベイ作成の「業務報告書」中の総括を参考とした。
17. 図版1～5は、株式会社琉球サーベイが撮影した写真を、再構成したものである。
18. 本書に掲載した図面などの記録は、那覇市市民文化部文化財課で保管している。

19. 本報告書の執筆担当は以下の通りである。なお、編集は山下真利子、真栄城和美、田川恵美の協力を得て、吉田が行った。

「首里旧金城村跡」 玉城安明

「御茶屋御殿跡」 吉田健太

那覇市内遺跡Ⅶ 目次

- 巻首図版 1 首里旧金城村跡周辺の空中写真
巻首図版 2 首里旧金城村跡の調査地遠景と完掘状況
巻首図版 3 御茶屋御殿跡周辺の空中写真
巻首図版 4 御茶屋御殿跡の石積状況

序
例言

首里旧金城村跡

第Ⅰ章 調査に至るまでの経緯

- 第1節 調査に至るまでの経緯 1
第2節 調査体制 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的背景 2
第2節 歴史的背景 8

第Ⅲ章 調査の内容

- 第1節 発掘調査の状況 9
第2節 層序 9
第3節 遺構 15
第4節 遺物 16

第Ⅳ章 まとめ 18

挿図目次

- 第1図 那覇市の位置 3
第2図 那覇市における遺跡調査地の位置 4
第3図 首里古地図にみる遺跡調査地の位置 5
第4図 首里古地図にみる遺跡調査地の位置(拡大) 6
第5図 遺跡調査地とその周辺の地図 7
第6図 遺跡調査地の位置 10
第7図 遺構平面図と壁面図 11
第8図 層序 12
第9図 遺構平面図 13
第10図 ピット平面図と断面図 14
第11図 (図版5) 青磁(碗・皿)・青花(碗)・褐釉陶器(鉢) 17

挿表目次

第1表 調査地の出土遺物一覧	16
----------------------	----

図版目次

図版1 上段:調査地近景(西側より)・下段:調査の状況(東側より)	21
図版2 上段:発掘の状況(南側より)・下段:調査の状況(東側より)	23
図版3 上段:遺構の完掘状況(南側より)・下段:遺構の完掘状況(東側より)	25
図版4 上段:遺構の完掘状況(西側より)・下段:遺構の完掘状況(北側より)	27
図版5 (第11図) 青磁(碗・皿)、青花(碗)、褐釉陶器(鉢)	29

御茶屋御殿跡

第I章 調査に至る経緯	33
第II章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	34
第2節 歴史的環境	34
第III章 調査経過と調査組織	
第1節 調査経過	40
第2節 調査組織	44
第IV章 遺構	46
第V章 まとめ	53

挿図目次

第1図 那覇市の位置と遺跡の位置	35
第2図 御茶屋御殿跡の位置及び周辺の遺跡	36
第3図 首里古地図にみる御茶屋御殿跡及びその周辺	37
第4図 首里古地図にみる御茶屋御殿跡	38
第5図 調査区位置図	41
第6図 調査区平面図	42
第7図 石積A面の立面図・縦横断面図	47
第8図 石積B・C・D面の立面図・縦横断面図	49
第9図 石積E面の立面図・縦横断面図	51

挿表目次

第1表 調査工程	40
----------------	----

図版目次

図版 1	石積 A 面の状況	57
図版 2	石積 B・C 面の状況	59
図版 3	石積 D・E 面の状況	61
図版 4	調査作業の状況	63
図版 5	調査作業の状況	65

報告書抄録

首里旧金城村跡



第 I 章 調査に至るまでの経緯

第 1 節 調査に至るまでの経緯

那覇市首里は、世界遺産である首里城跡を中心とした、琉球王国時代の城下町として形成された地域である。特に金城町地域には現在でも石畳道や屋敷囲いの石垣や井泉などが随所に残されており、往時の集落景観を見ることができる。しかし、近年市内いたるところで公共事業・民間開発・個人住宅建設の増加はここも例外ではない。特に同地域は老朽化した個人住宅の新築が急増しており、既存建物を取り囲む石垣や地下に埋蔵された遺構など、往時の状況を知る手がかりが急速に失われようとしている。

かかる状況に対して迅速な対応を講ずべく、平成 18 年度および平成 28・29 年度に「那覇市内遺跡」として文化庁による国庫・県補助事業にて予算化し、埋蔵文化財発掘調査を実施して遺跡の保護に充てることとした。

平成 18 年 4 月 25 日、那覇市教育委員会文化財課に首里金城町 3 丁目地内に住宅建設計画があるとの情報がもたらされた。これを受けて埋蔵文化財の有無を確認するために当該地の試掘調査を行ったところ地下に遺物包含層が確認され遺跡の存在が判明した。調査結果と今後の遺跡の取り扱いについて原因者と協議を行い、住宅建物本体はベタ基礎工法による建設であることから地下の遺跡への影響は無いものと判断、浄化施設により影響の避けられない約 6 m²について発掘調査を実施することを確認した。発掘調査は 9 月 14 日より着手した。

なお、調査地は近世期「内金城村」に属していたところであるが、現在の住所表記では首里金城町となっている（第 3～5 図）。町内における遺跡所在地の名称については煩雑さを避けるため、便宜的に包括的な名称として「首里旧金城村跡」とした。

第 2 節 調査体制

平成 18 年度の発掘調査は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会	教 育 長	桃原	至上
事業主管	文化財課	課 長	古塚	達朗
調査総括	〃	副 参 事	島	弘
調査事務	〃	副 参 事	島	弘
〃	〃	主 査	田畑	睦子
〃	〃	主任主事	赤嶺	増美
調 査 員	〃	副 参 事	島	弘
〃	〃	専門員主査	玉城	安明
〃	〃	主任専門員	仲宗根	啓
〃	〃	〃	樋口	麻子

調査員 文化財課 主任専門員 當銘 由嗣 (平成 28 年)

発掘調査作業員 具志 尚樹 (臨時職員)

〃 瀬名波 一貴 (臨時職員)

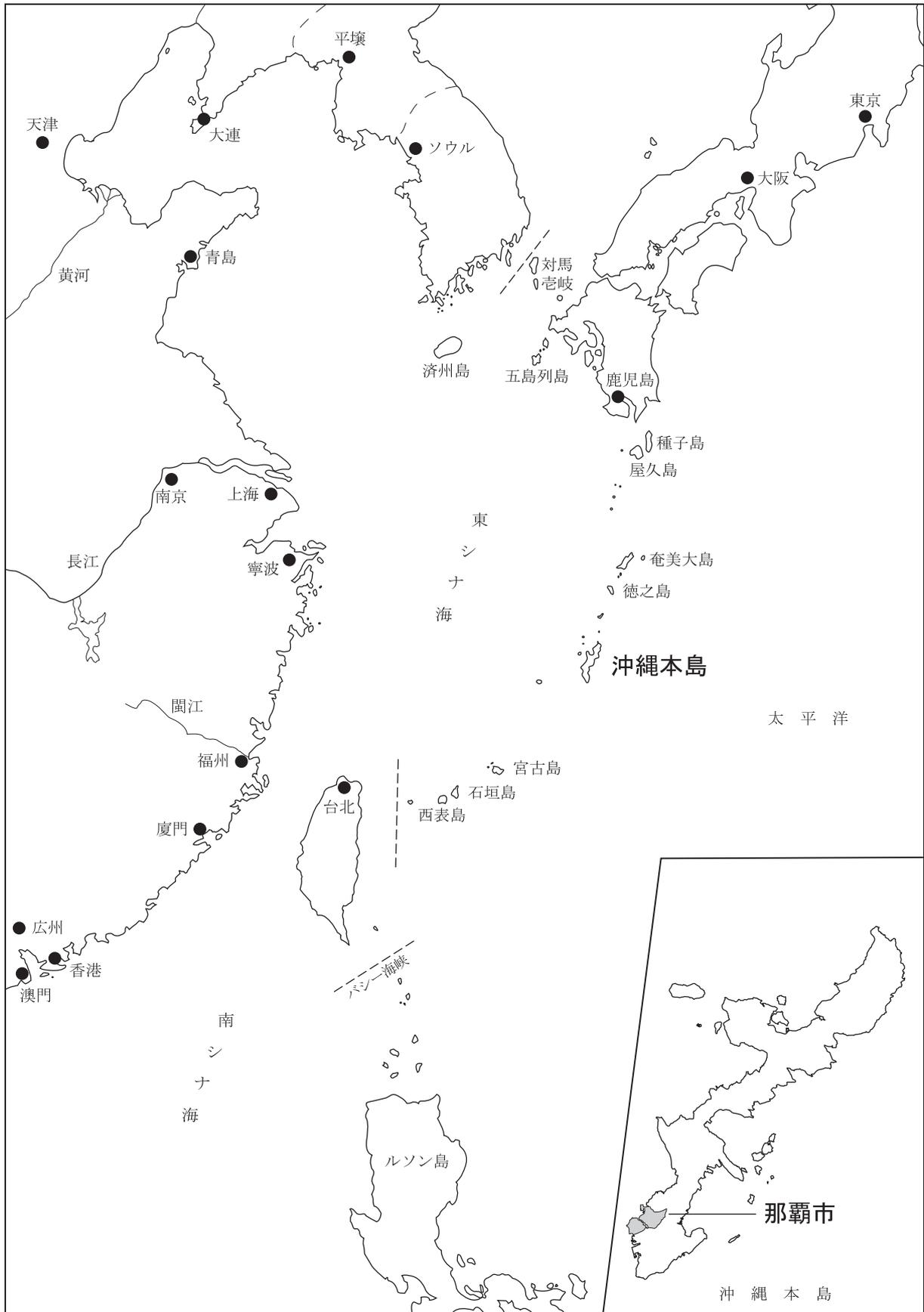
平成 27～29 年度の資料整理および報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市	市長	城間 幹子
事業主管	那覇市市民文化部	文化財課 課長	岸本 修
事業事務	〃	〃 副参事	島 弘
〃	〃	〃 主幹	内間 靖
〃	〃	〃 主査	神谷 なおみ
〃	〃	〃 主任主事	高嶺 朝美
調査員	〃	〃 副参事	島 弘
〃	〃	〃 主幹	内間 靖
〃	〃	〃 専門員主査	玉城 安明
〃	〃	〃	仲宗根 啓
〃	〃	〃 主任専門員	樋口 麻子
〃	〃	〃	當銘 由嗣
〃	〃	〃 主任学芸員	安斎 真知子
〃	〃	〃 学芸員	古田 建太
資料整理	〃	〃 非常勤	小原 忍 (平成 27 年度)
		〃	山下 真利子 (平成 28・29 年度)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的背景

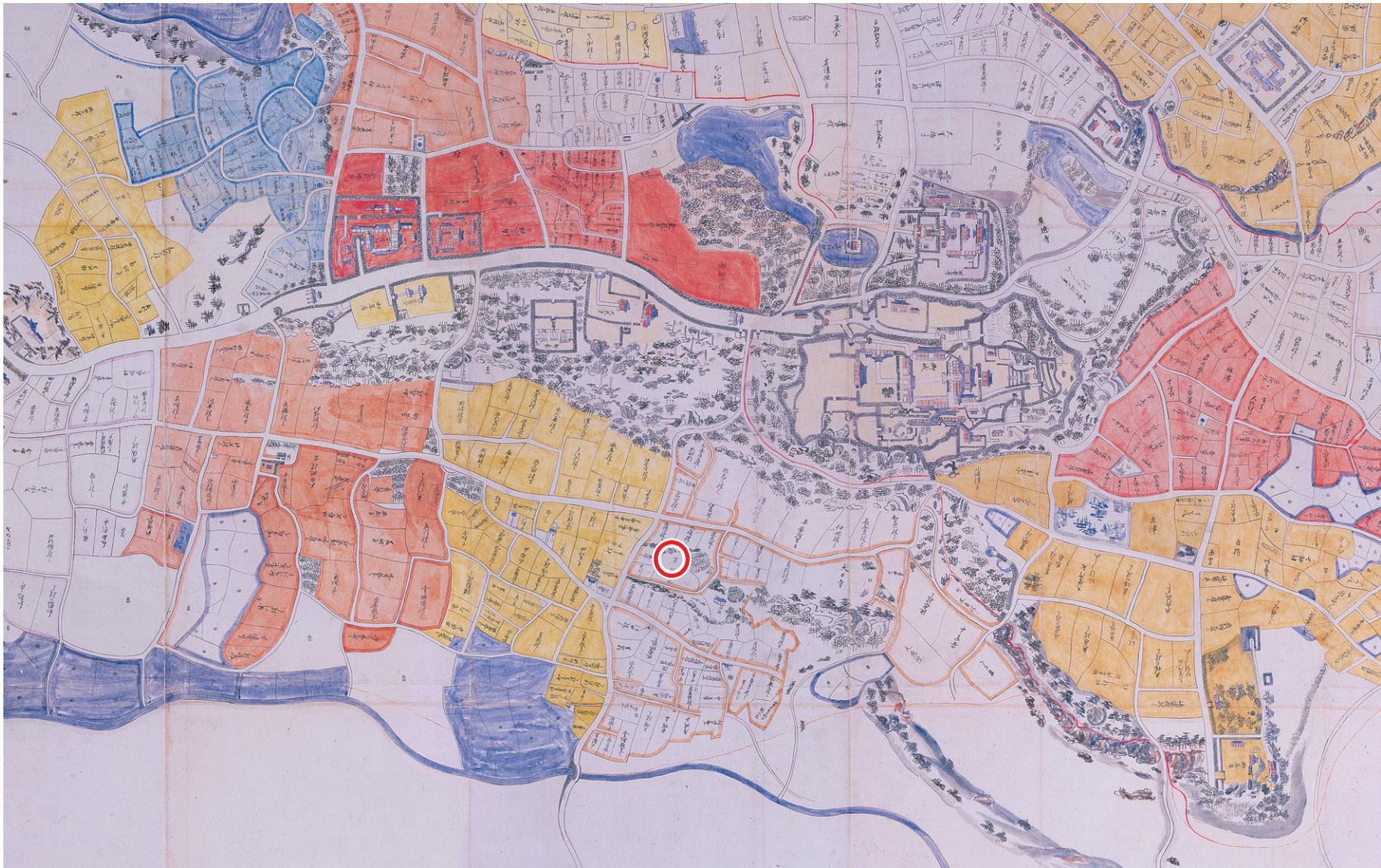
「首里旧金城村跡」は沖縄県那覇市首里金城町に所在する。那覇市は沖縄本島南部に位置し、もともと異なる行政区であった那覇市、首里市、真和志市、小禄村の各自自治体が戦後順次合併を繰り返して現在の市域になったものである。北に浦添市、南方を豊見城市、東方に西原町・



第1図 那覇市の位置



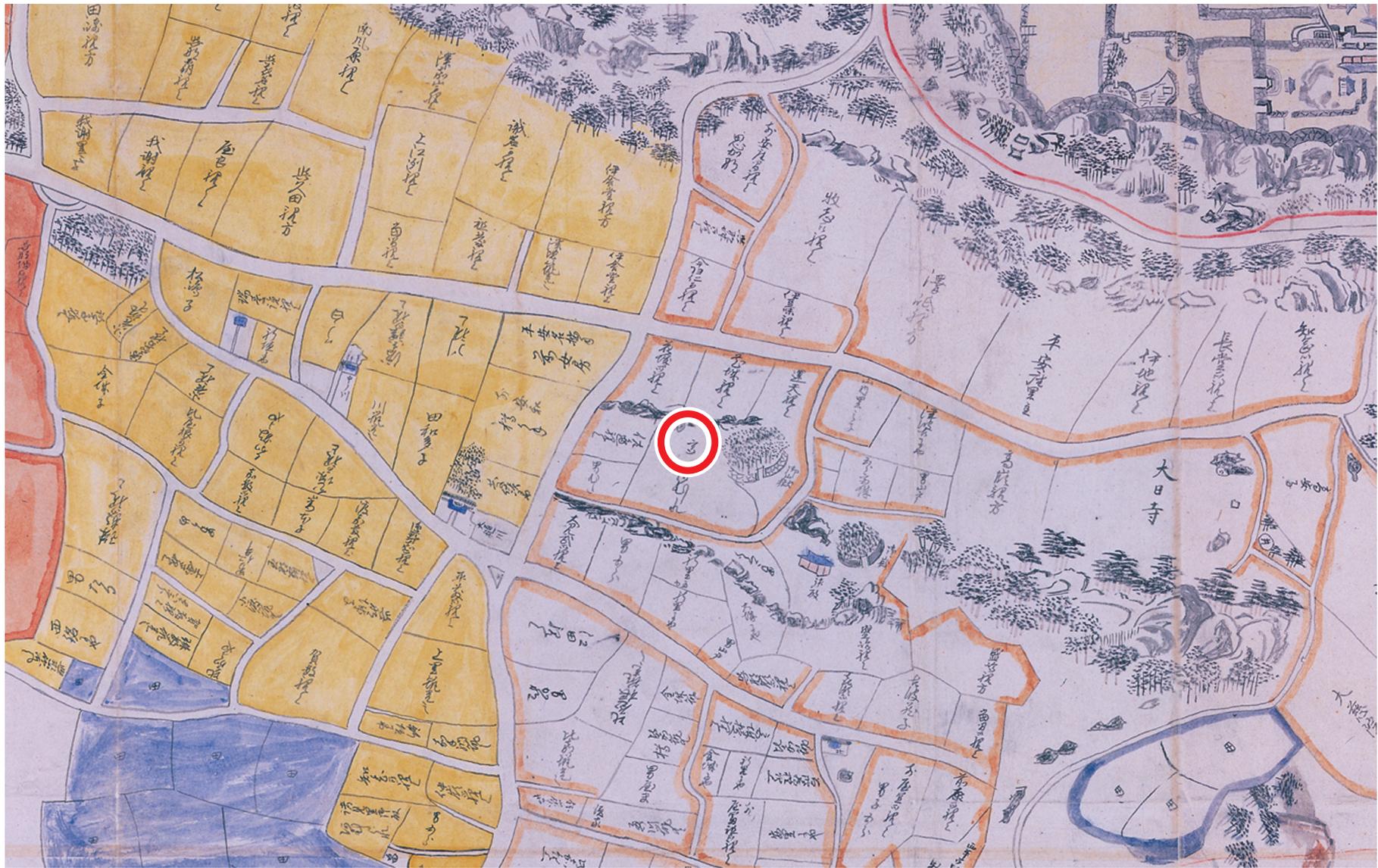
第2図 那覇市における遺跡調査地の位置 ○内は調査地



第3図 首里古地図にみる遺跡調査地の位置

○内は調査地

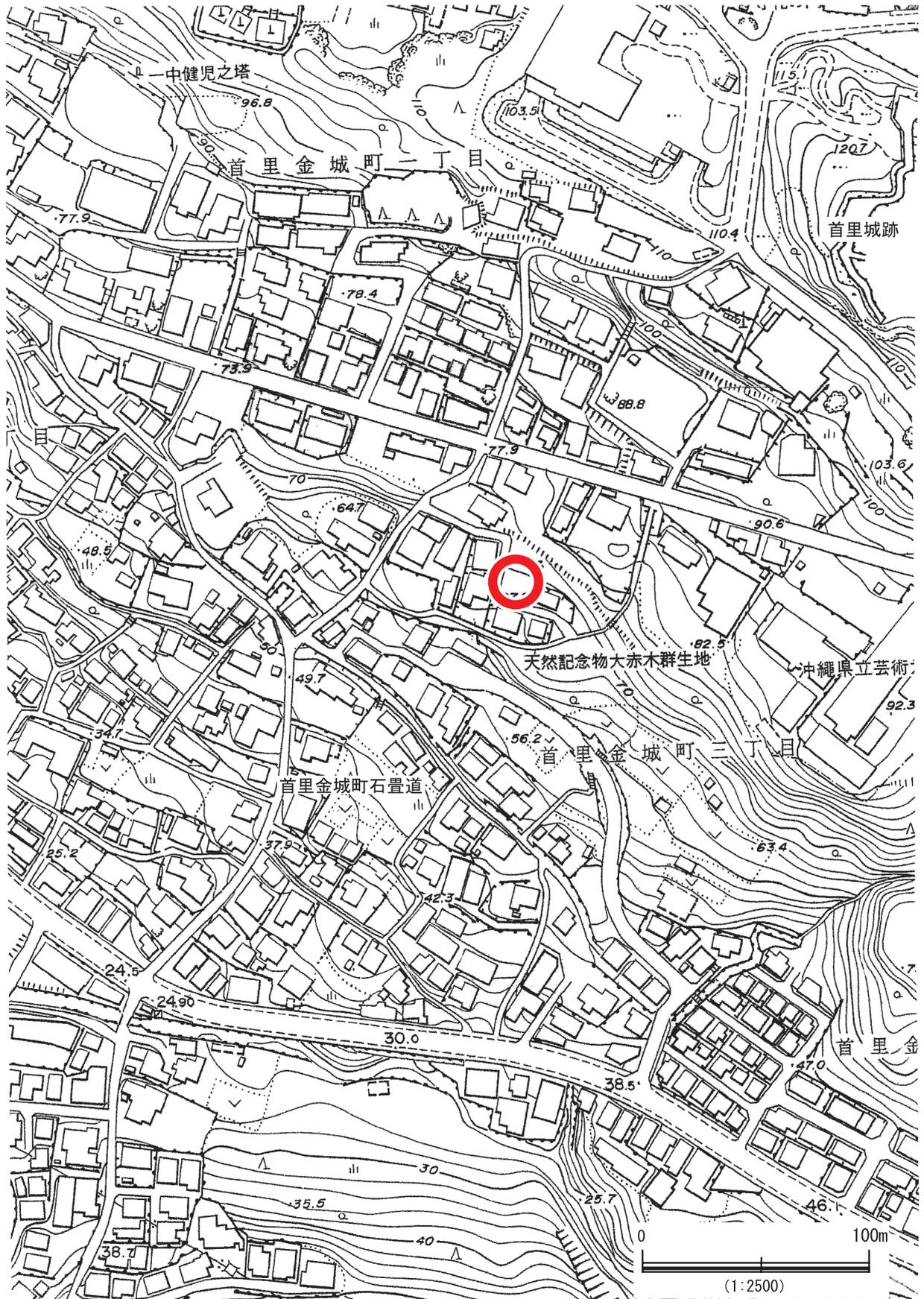
(首里古地図 沖縄県立図書館所蔵)



第4図 首里古地図にみる遺跡調査地の位置(拡大)

○内は調査地

(首里古地図 沖縄県立図書館所蔵)



第5図 遺跡調査地とその周辺の地図

○内は調査地

南風原町に接しており、西は東シナ海に面している。市の面積は 38.63 km²、全体にやや北東から南西に長い略三角形を呈する（第 1 図）。人口は平成 28 年 11 月現在で 323,075 人、県全体の人口の約 4 分の 1 を占める。近年市北西部の天久・銘苅地区の新都心やこれに隣接する真嘉比・古島地区、同じく市南部小禄金城地区・小禄南地区などの諸区画整理事業がほぼ完了しこれらの各地区を中心に大型商業店舗や事業所の進出、住宅の増加が顕著である。またこれらの市街地と国際通りなどの既市街地を結ぶ都市モノレールの開通したことによる交通の利便性向上とも相俟ってこれまで頭打ちであった人口も増加傾向を示すとともに経済的な活況を呈するようになってきた。他方県庁所在地でもあり国の出先機関の多くも所在するなど、文字通り政治経済の中心地である。

地質の面でみると、沖縄本島中南部は第三紀鮮新世島尻層群を基盤とし、那覇市もこれを基盤としている。この層はさらに下位から上位へ豊見城層・与那原層・新里層に細分され、このうち豊見城層は砂岩と泥岩の互層からなり、下部は泥岩、上部は砂岩が優勢である。市内小禄から真和志・真嘉比方面にかけて分布する小禄砂岩層（微粒砂岩：通称ニービ）はこの上部砂岩に属する。この島尻層群のさらに上位は第四紀更新世琉球石灰岩層が覆っており、市域縁部の天久・首里・識名などはこの琉球石灰岩を主な基盤とする丘陵台地となっており、旧那覇および真和志の一部など 2～10m の低平地を形成する第四紀完新世堆積物である沖積層を取り囲む。これらの台地側から国場川・安里川・真嘉比川・安謝川など各河川が東西に横断するように沖積層を侵食して流れ込み、東シナ海へと注がれている。河川の河口域では海水と淡水が混ざり、一方で内陸からの肥沃な養分が運ばれて来ることで漁場となり、また適当な水深もあったことから、国場川や安里川河口部は港として発展していったと考えられる。

第 2 節 歴史的背景

調査地は那覇市首里金城町 3 丁目に所在する。前項で触れたとおり「首里城跡」の所在する琉球石灰岩を主な基盤とする首里台地の南麓に位置し、金城川を挟んで識名台地と対峙する。この首里の歴史的シンボルともいえる首里城の築城は現時点で明確ではないが、正殿跡の発掘調査では正殿の創建は 14 世紀前半～中葉、あるいは 14 世紀代になされたのではないかとの見解が示されている。1427 年建立の「安国山樹華木碑記」において首里城周辺に池（龍潭）を掘り、山を築いて華木を植えたことが記されており、少なくとも尚巴志王代（1422 年～1439 年）の頃には王都としての周辺へのまちとしての本格的整備が始まったと考えられる。

王府時代において金城村の成立時期もまた明らかではない。ただ、王都として定まった後、歴代王（王統）により漸次整備が進められていった中で、尚真王代（1477 年～1526 年）に首里と各地方を結ぶ道が整備されたが、そのひとつとして 1522 年首里と島尻・那覇湊を結ぶ道（真珠道）が整えられたことが「真珠湊碑文」（拓影）にみえ、そのひとつが金城町を通るこの道と考えられることから少なくともその頃には沿道の居住区として成立していたと思われる。

18 世紀初頭に作成されたと考えられる「首里古地図」には今も残る首里の基本的な街並み区画を見ることができ、それによれば先の「真珠道」、現在の「首里金城町石畳道」を境に東西で色分けされており、行政区域が異なっていた事がわかる。すなわち真珠道より西側を金城

村、同じく東側を内金城村としている。今回の調査地はこのうち「内金城村」に属し、現在も残る記念物である「内金城嶽」「首里金城の大アカギ」なども村域に含まれる（第3～6図）。

第三章 調査の内容

第1節 発掘調査の状況

調査は平成18年9月14日から22日までの期間で行った。先述のとおり今回は開発面積176.50㎡のうち工事による掘削の避けられない浄化施設部分の約6㎡を対象とした発掘調査である。まず現地にて位置を出し発掘区を設定。申請地内の全面舗装路に面した設置予定箇所にて2×3mを設定した。その後手掘りにて掘方作業を開始する。事前に行った試掘箇所と一部重なっていることで大凡の土層の状況が把握出来ていたのを確認しながら、また同箇所の埋め土と混じらないよう慎重に掘り進めた。各土層から出土した遺物は採取した。

土層を掘り進めてピット群を確認。写真撮影および実測を行った。地山まで掘り切ったところで土層壁面および遺構の精査を行った。全体の清掃を行い写真撮影した。土層壁面の実測作業を行った。その後埋め戻して現地での作業を完了した。

第2節 層序

層序は表土から地山を含め9枚が確認された。以下、各層について略述する。土層セクションは発掘坑内の東西南北4壁面全てを掲げた（第7・8図、図版3・4）。

第1層（茶褐色層）：表土層。

第2層（紅白色砂礫層）：砂と赤土を混ぜた整地層。

第3層（茶褐色砂礫層）：石灰岩小礫やバラス・ガラス片や赤瓦片を含む。

第4層（茶褐色混礫土層）：石灰岩小礫や炭を僅かに含む。締まりはあまり良くない。壺屋陶器などが出土する。同層以上の層準は近現代の堆積層である。

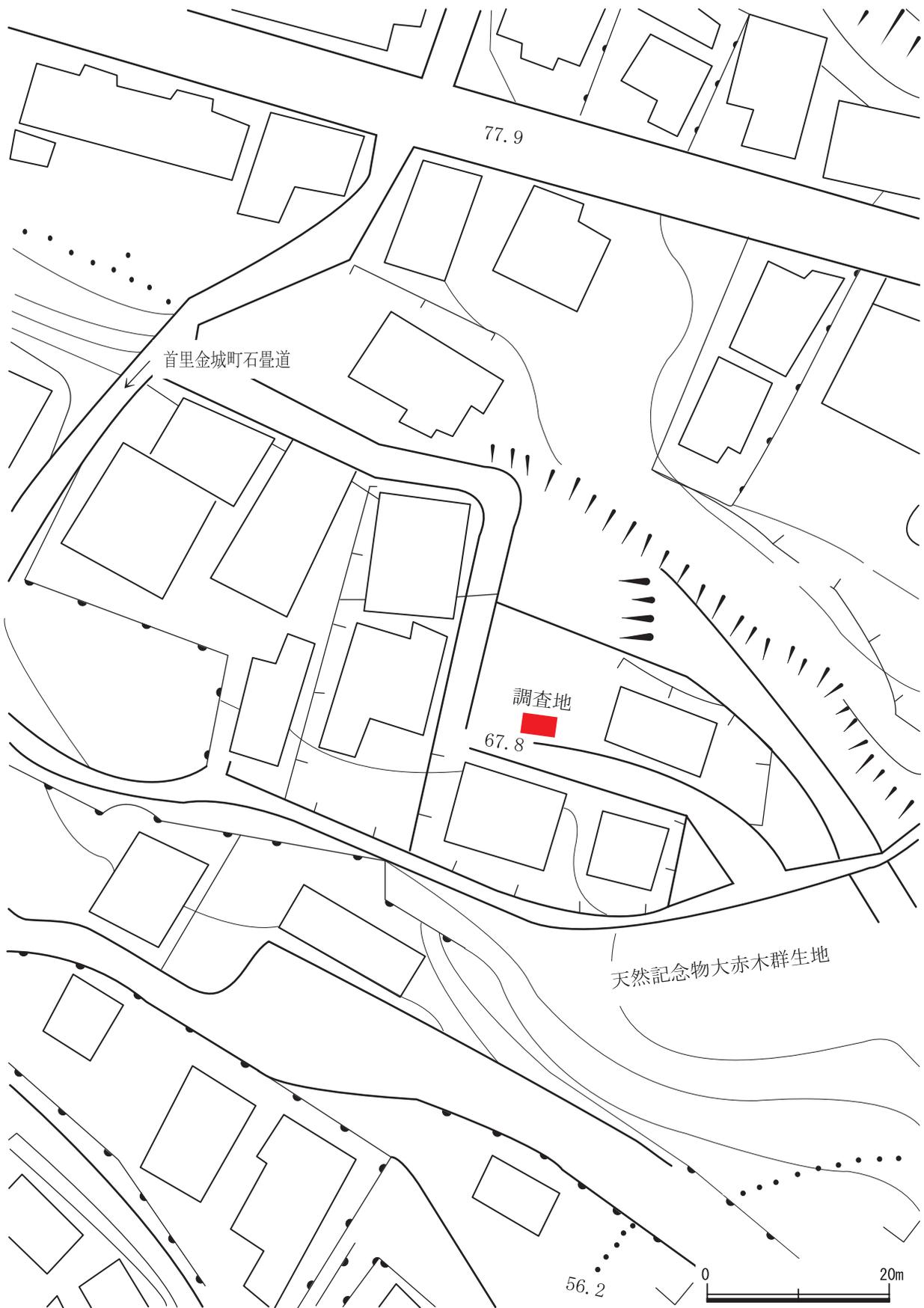
第5層（明褐色混礫土層）：第4層同様石灰岩小礫や炭、赤色粒子を僅かに含む。締まりはあまり良くない。近代～近世頃の層の可能性はあるが具体的な時期の判る遺物の出土はなかった。

第6層（黒褐色土層）：遺物を僅かに含む、所謂遺物包含層。しまりは良い。層の上面はほぼ水平であるが下位は地山の第9層に接する部分においてやや厚みを増す。

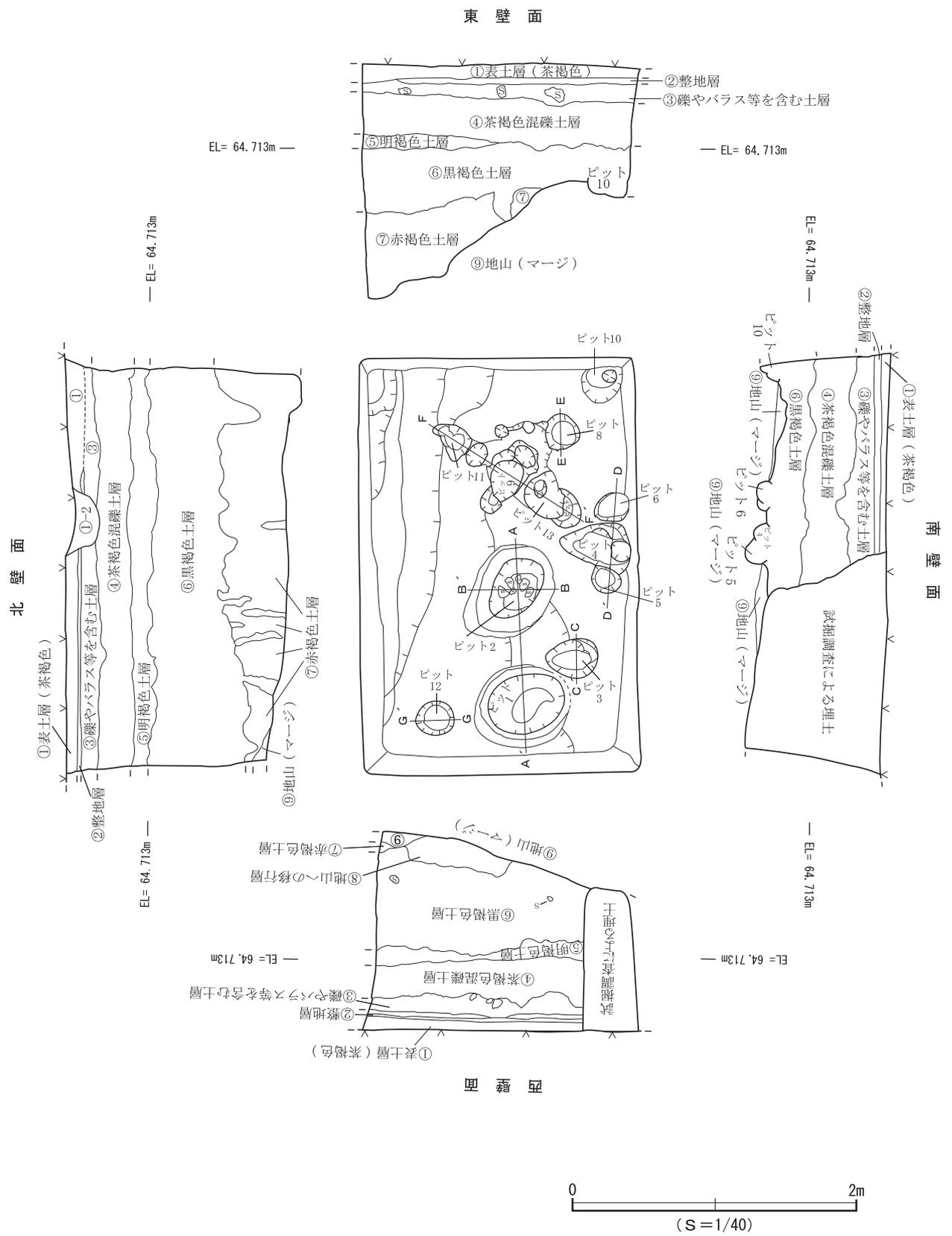
第7層（赤暗褐色土層）：遺物を僅かに含む。層相は上位第6層に共通するが色調は赤味を帯びる。

第8層（暗褐色土層）：上位第6層（遺物包含層）と第9層（地山）間に部分的に認められる。地山への移行層。

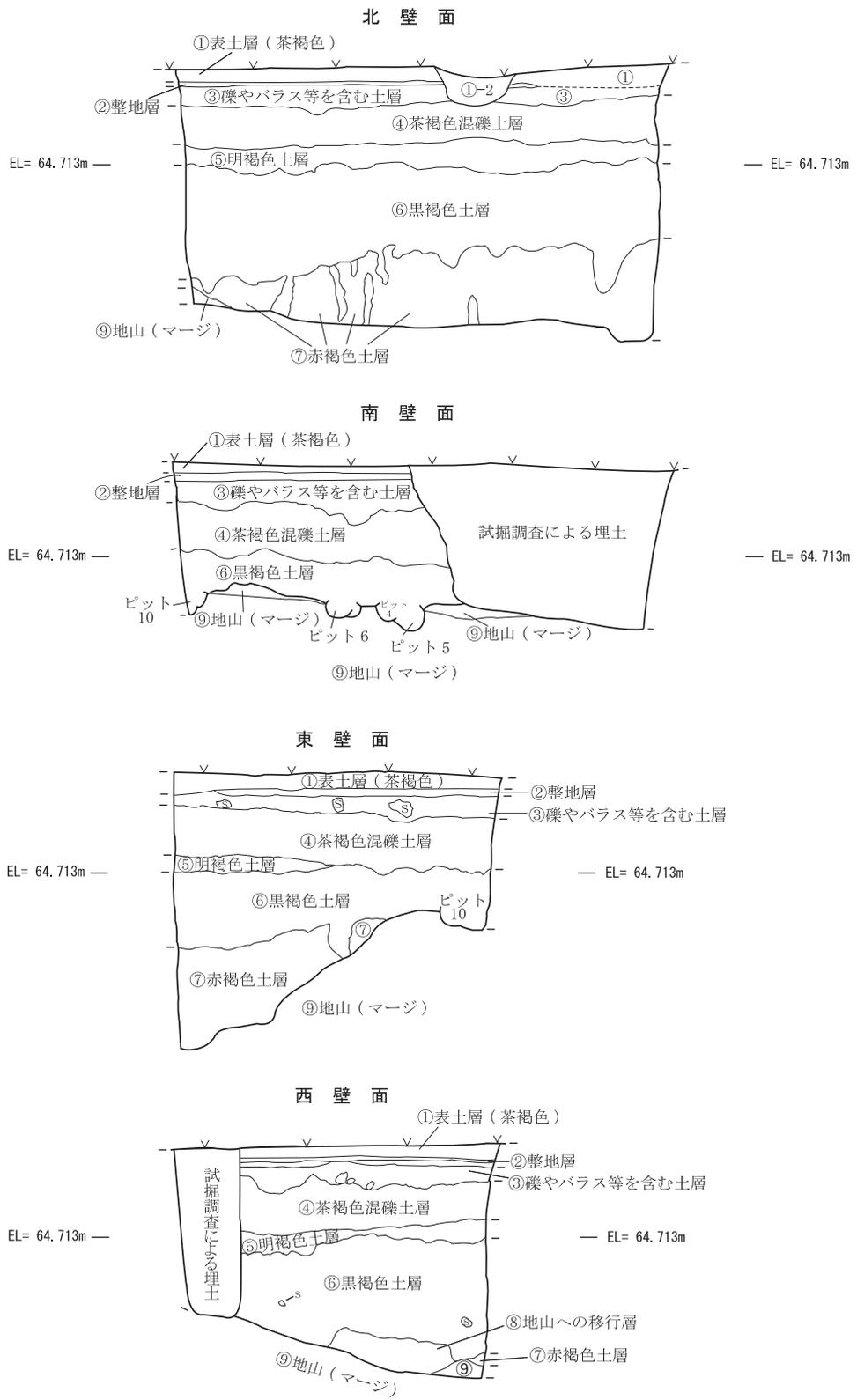
第9層（橙褐色土層）：琉球石灰岩の風化土とされる所謂マージの地山である。発掘坑内において北壁側、特に北東隅へかけて強く傾斜し落ち込んでいく。



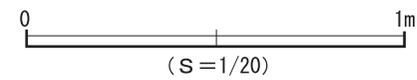
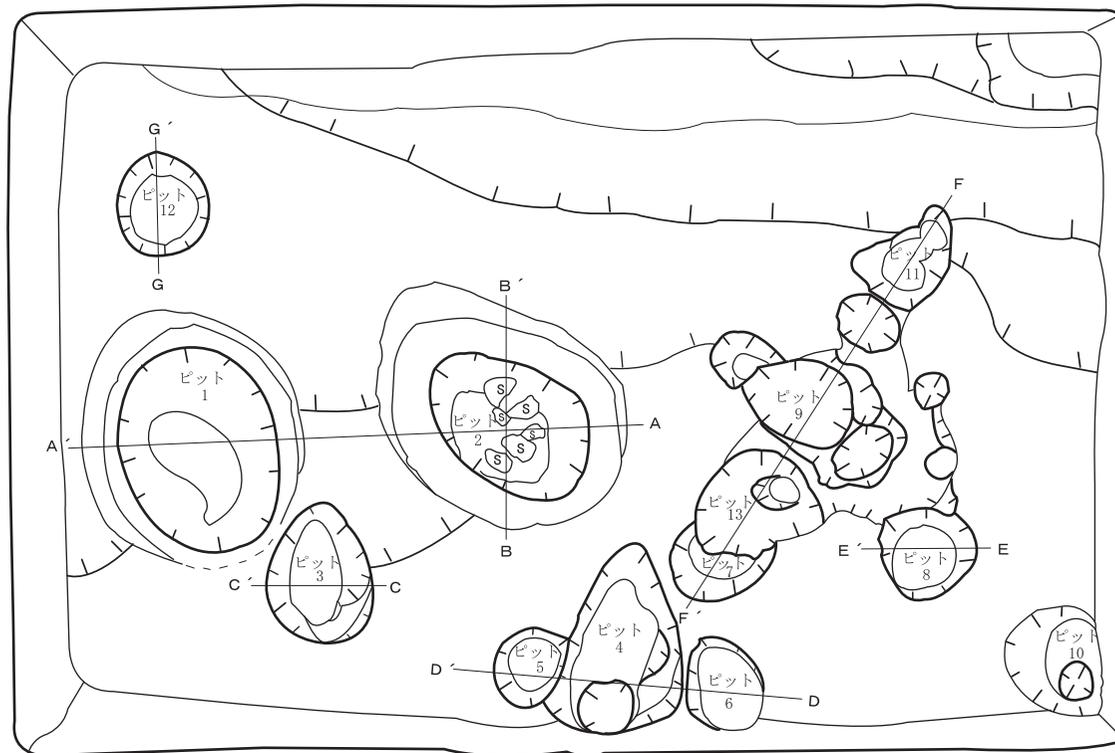
第6図 遺跡調査地の位置



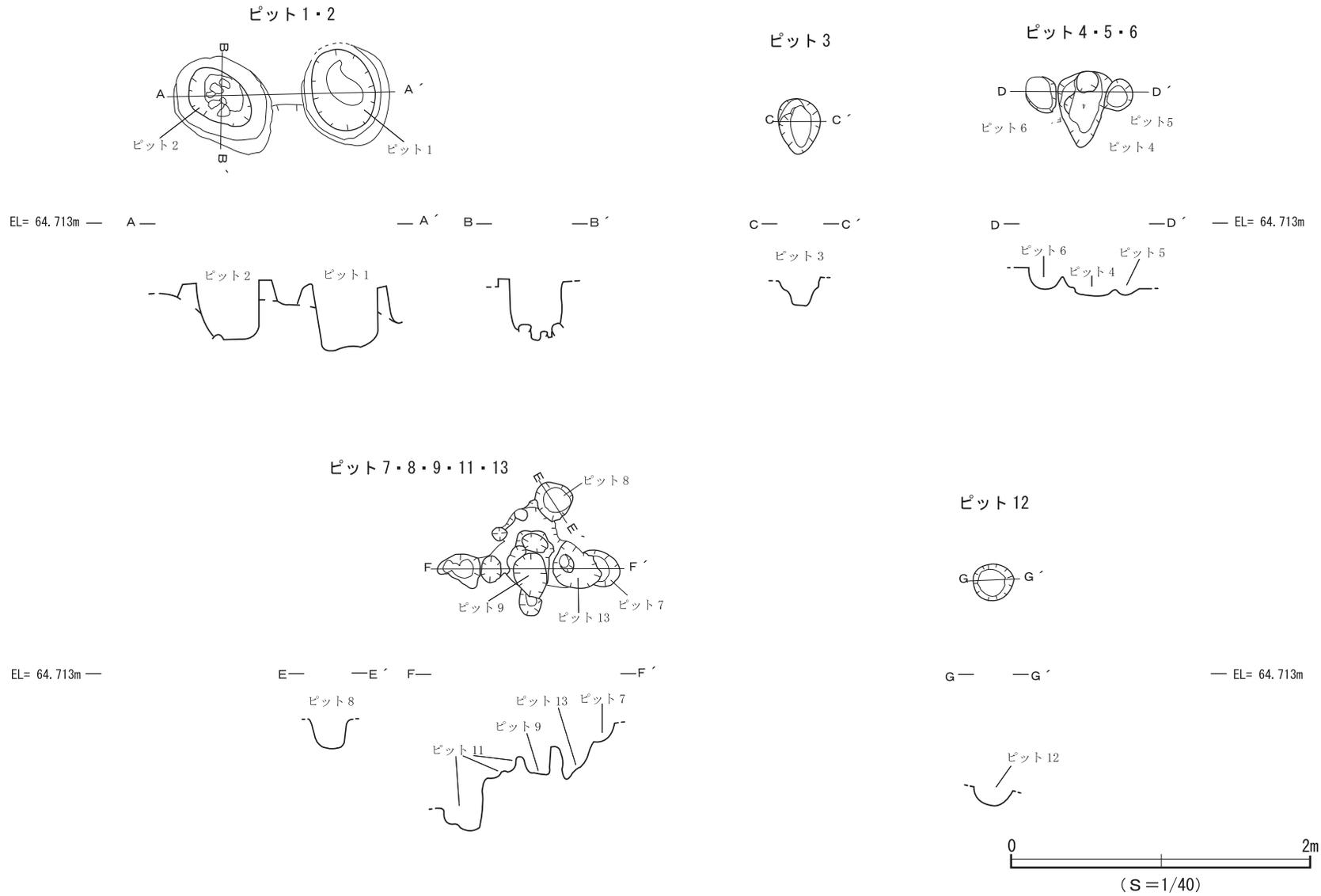
第7図 遺構平面図と壁面図



第8図 層序



第9図 遺構平面図



第10図 ピット平面図と断面図

第3節 遺構

13本のピットが検出された（第7～10図、図版3・4）。これらにはサイズに大小があり、また遺構同士の重複により掘方形状の不明瞭なものもある。特徴について個別に略述する。

ピット 1：平面長 54cm×44cm の楕円形。深さ 48cm。円柱形に掘り込まれ、底には平面楕円形の平坦面を有す。比較的大型である。

ピット 2：平面長 50cm×33cm の楕円形。深さ 40cm。ピット 1 同様大型である。底に柱を固定するためとみられる数個の石灰岩小礫を残す。

ピット 3：平面長 39cm×29cm の楕円形。深さ 20cm。底へかけてやや窄まり平坦面を有する。

ピット 4：平面長 52cm×31cm の楕円形。確認面での深さ 6 cm。浅い皿状の形状である。後述のピット 5・6 に挟まれたかたちで接する。

ピット 5：平面径 23cm。確認面での深さ 6 cm。浅い皿状となっている。ピット 4 に接する。

ピット 6：平面径 22cm。確認面からの深さ 13cm。ピット 4 に接する。

ピット 7：平面残存長 23cm。確認面からの深さ 12cm。ピット 13 に重複し切られているため形状は明確でない。

ピット 8：平面径 26cm の円形。深さ 20cm。

ピット 9：現存平面長 28cm の不定形。隣接するピット 13 と重複しており平面形は不明瞭である。深さ 20cm。

ピット 10：現存平面長 28cm の楕円に近い形とみられる。確認深さ 14cm。南東隅の壁面に隠れており全形は判らない。

ピット 11：現存平面長 30cm の不定形。深さ 35cm。抜き痕とみられる窪みを伴う。

ピット 12：平面径 28cm の円形。深さ 12cm。

ピット 13：平面長 30cm 楕円形に近い不定形。深さ 26cm。断面は底に窄まる錐状を呈する。隣接するピット 7 を切るかたちで作られる。

第1表 調査地の出土遺物一覧

遺物の種類 出土層	中国産			タイ産半練	本土産			沖縄産			産地不明(褐釉)	瓦	獣骨(不明)	不明	合計
	青磁	青花	褐釉		磁器	陶器	褐釉	施釉	無釉	陶質土器					
表採～第1層	1	2			1			2							6
第4層					2		1		1	2				1	7
第6層	2	6	1					3	2	2		4	1	6	27
第7層	4			1		1		3		3	1		5	7	25
合計	7	8	1	1	3	1	1	8	3	7	1	4	6	14	65

第4節 遺物

総数 65 点の遺物が出土した。これらはプライマリーな層とみられる第 4 層以下から出土した遺物を採取した (第 1 表)。

主なものを図示した (第 11 図)。

青磁 (第 11 図 1・2、図版 5 の 1・2)

同図 1 は碗の口縁部、同図 2 は皿の底部高台部片資料である。前者は口唇部の断面が舌状を呈する直口。外面には篋彫りによる鎬連弁文が描かれる。釉は淡いオリーブ色、素地は灰色の微粒子である。器壁厚 5 mm。

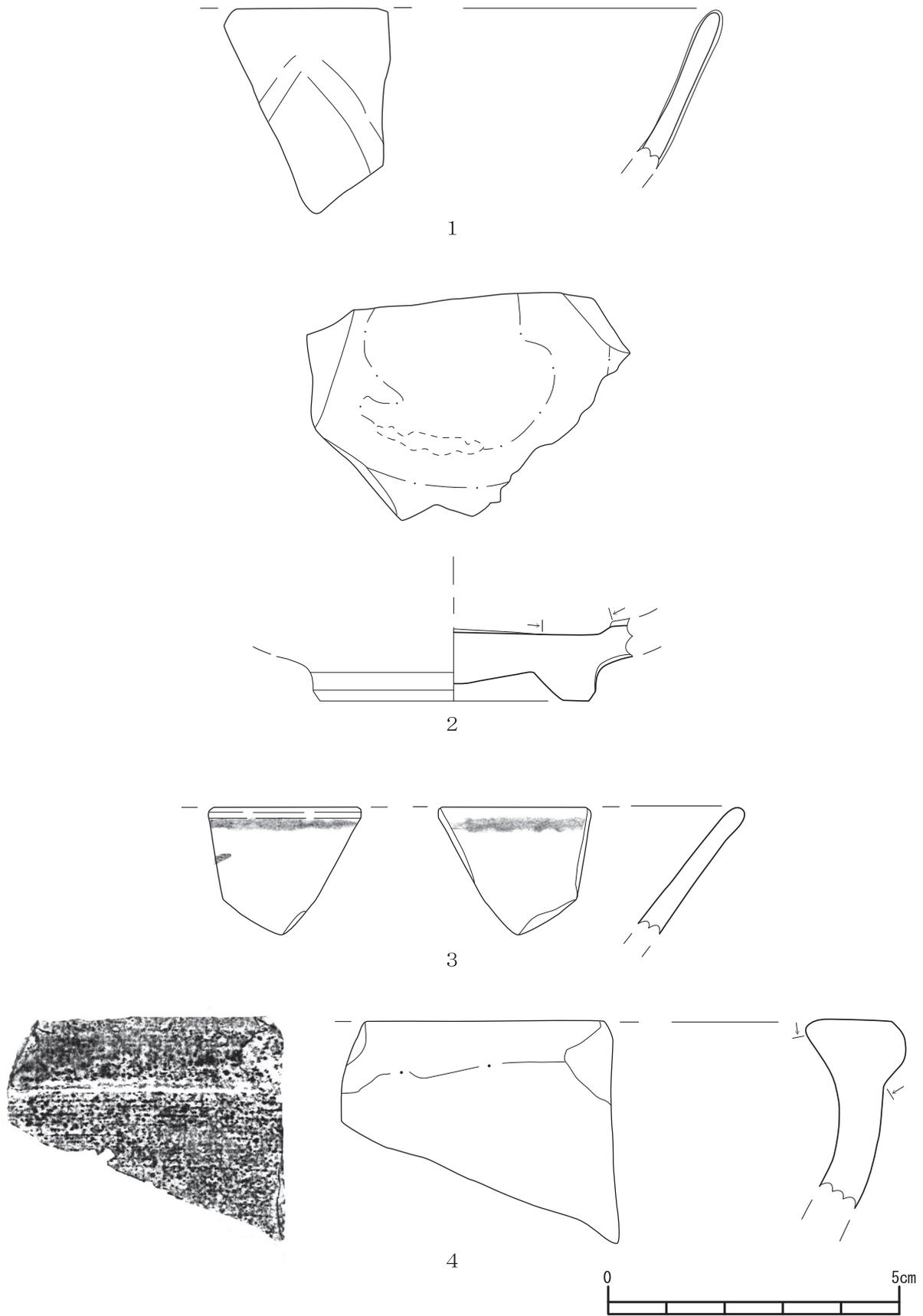
後者は見込みにやや雑な蛇の目釉剥ぎを施す。釉は灰緑色。焼成不良のため釉葉の発色は悪く、塗布した面もザラ付く。高台周りなど外面残存部は露胎。素地は灰色で軟質。高台内外を削り出すが内側を斜めに削り出したことで畳付は窄まる。高台径 48mm。

青花 (第 11 図 3、図版 5 の 3)

碗の口縁部片である。直口口縁。口唇部下内外面にくすんだ淡い青色の圈線を施す。外面圈線の下には別の文様の一部がみられる。透明釉には貫入がみられる。素地は乳白色で粗く僅かに気泡も観察される。器壁厚 3 mm。

褐釉陶器 (第 11 図 4、図版 5 の 4)

標品は鉢。口縁内外を強調する内湾器形。内縁は尖状、外縁は丸く張り出し、口唇は平坦に整形される。口縁部に褐色釉を掛ける。外面にロクロ痕を残す。素地は軟質で胎土に白色・赤色粒が散見される。口唇厚 16mm、器壁厚 8 mm。



第 11 图 (图版 5) 青磁：碗 (1)、皿 (2)
 青花：碗 (3)
 褐釉陶器：鉢 (4)

第IV章 まとめ

以上、調査の概要を述べた。ここで今一度確認してまとめとしたい。

調査範囲の狭限な小発掘であったが13本のピットが検出された。

これらのピット群については明確なプランをおさえることはできなかったが、周辺の試掘調査等によって付近には今回の調査地とほぼ同レベルで遺物包含層の堆積していることが確認されている。そのような中で今回の調査地点において地山が北側への傾斜し落ち込んで深くなっていくという状況の理由は不明であるが、土坑などの遺構あるいは自然流路が存在している可能性が考えられた。土層堆積は、地山の傾斜を第7層赤褐色土層がこれを埋めるように堆積し、続いて遺物包含層である第6～8層の堆積でもってほぼ水平となっており、これに付随してピット1・2が作られている。このことから地山を第7層土で造成あるいは造成の過程でフラットに整地しそこへ柱を伴う何らかの構造物を作ったことが解る。

一方、出土遺物を見てみるとその量は必ずしも多くない。今回の調査で得られた資料中最も古い青磁碗（第11図1）は14世紀頃に遡る可能性のあるものだが、表採資料であり今回の調査地の時期を直接示すものではなく、ここではメインとなる第6層を中心とした第6～8層からの出土遺物の下限時期で捉えるべきであろう。この場合少なくとも16世紀の時期が想定される。折しもこの時期首里と各地を結ぶ街道が整備され、併せて首里金城町の道も1522年頃に整備されたとみられており、今回の調査での状況は往時の模様の一端を示すものといえよう。

図 版



図版 1 上段：調査地近景（西側より）
下段：調査の状況（東側より）



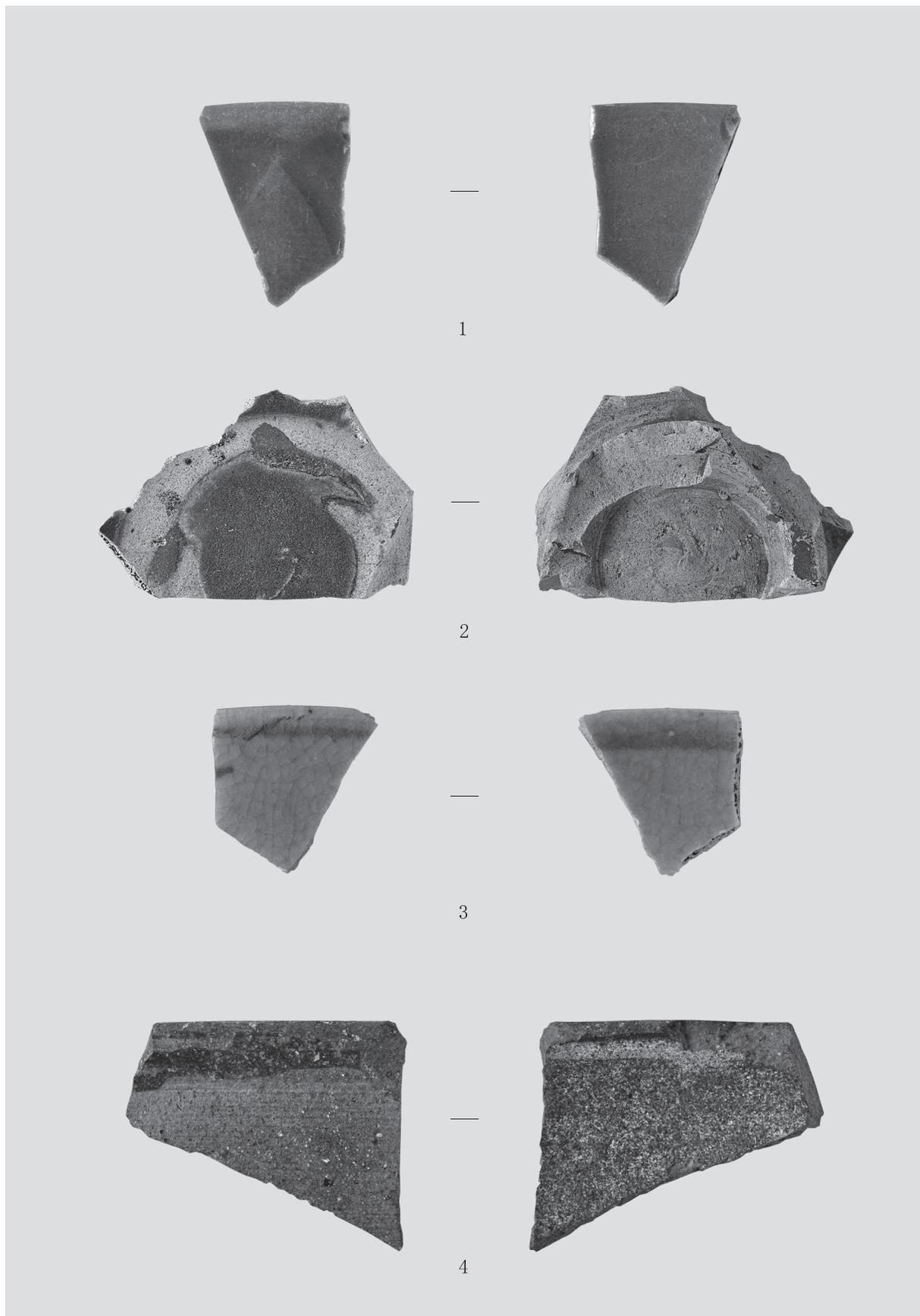
図版2 上段：発掘の状況（南側より）
下段：調査の状況（東側より）



図版3 上段：遺構の完掘状況（南側より）
下段：遺構の完掘状況（東側より）

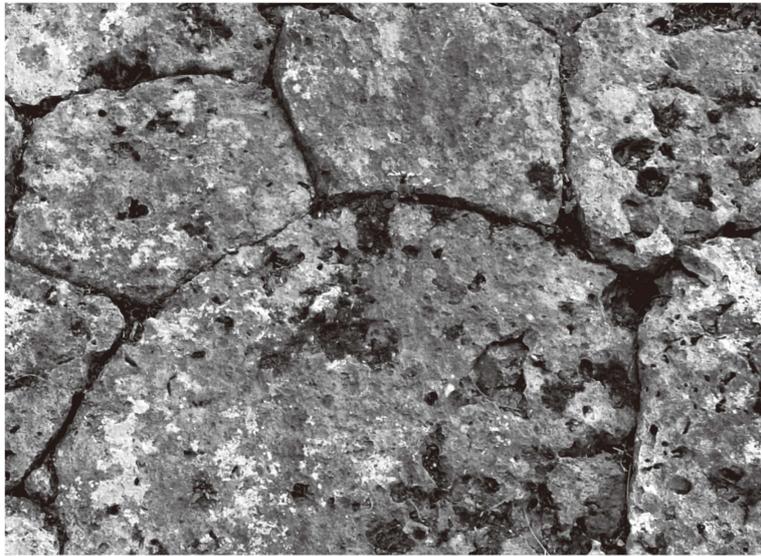


図版4 上段：遺構の完掘状況（西側より）
下段：遺構の完掘状況（北側より）



图版5(第11图) 青磁 : 碗(1)、皿(2)
 青花 : 碗(3)
 褐釉陶器 : 鉢(4)

御茶屋御殿跡



第 I 章 調査に至る経緯

御茶屋御殿及び首里城が所在する首里は琉球王国の政治・文化の中心地であり、特に国王の居城である首里城の周辺には様々な施設が並んでいた。御茶屋御殿跡は 1677（尚貞 9）年に創建されたという旧王家の別邸跡である。国王の遊覧及び国賓の歓待に使用された施設であり、詩歌管弦の催しや茶道・生花・武道・囲碁など多様な芸能が披露されたという。首里城の東方に位置する庭園であることから東苑とも呼ばれ、南苑と称された識名園とともに琉球文化の発信地として知られていた。

しかし第二次世界大戦の際に、第 32 軍司令部壕が構築されていた首里城及びその一帯は米軍の集中砲火を浴び、貴重な文化遺産もことごとく灰燼に帰した。御茶屋御殿も他の文化財と同様に戦禍からは逃れられず、茶亭南側の石積を残し、建物は全て消失してしまった。戦後、跡地には首里カトリック教会および付属幼稚園が建設されて、現在に至っている。

戦後、昭和 30 年代に行われた園比屋武御嶽石門の復元修理を嚆矢として、被災した首里城及びその周辺文化財の復元・修復が次々と着手された。首里城跡も 1972（昭和 47）年の本土復帰直後に歓会門及び久慶門等の整備が実施され、1984（昭和 59）年の旧琉球大学の移設完了に伴い、「首里城公園基本計画」や「国営沖縄記念公園首里城地区基本計画」を基軸とする本格的な復元整備が始動した。首里城跡を中心とした文化財の整備が進行し、現在までに歴史的景観の復元がすすめられている。

それに伴い、旧王家の別邸であった御茶屋御殿跡への関心が高まったことを受け、2000（平成 12）年度から 2005（平成 17）年度にかけて、沖縄県立埋蔵文化財センターにより御茶屋御殿跡の遺構確認調査が実施された。調査の結果、敷地内に所在した茶亭の基礎に相当する礎石や石列遺構、茶亭の離れ厠と想定される石組み遺構などが調査され、くわえて旧茶亭跡地南側の石積が比較的良好に残されていることが確認された。しかし残っていたとされる南側石積の全貌は把握されていない状況であった。そのため那覇市は現状把握のための調査が必要との判断から、2016（平成 28）年度に文化庁の補助を得て調査を実施することとなった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

那覇市は東シナ海に面した沖縄本島南西部にあり、北に浦添市、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城市と隣接する、人口約33万人を擁する沖縄の政治・経済の中心都市である(第1図)。

本市は、ほぼ略三角形を呈し東西に約11km、南北に約8kmを測り面積約37.89km²を占める。地形的には東シナ海側の市街地は標高2~10mの沖積地を琉球石灰岩の台地が北より天久台地、東に首里台地、南に識名台地・小禄台地を取りまき大きく低地と石灰岩台地に分けられる。また、市内には台地より低地に安謝川・安里川・国場川などが東シナ海へ流れ込む。市内は首里地区・那覇地区・真和志地区・小禄地区の4つに区分される。

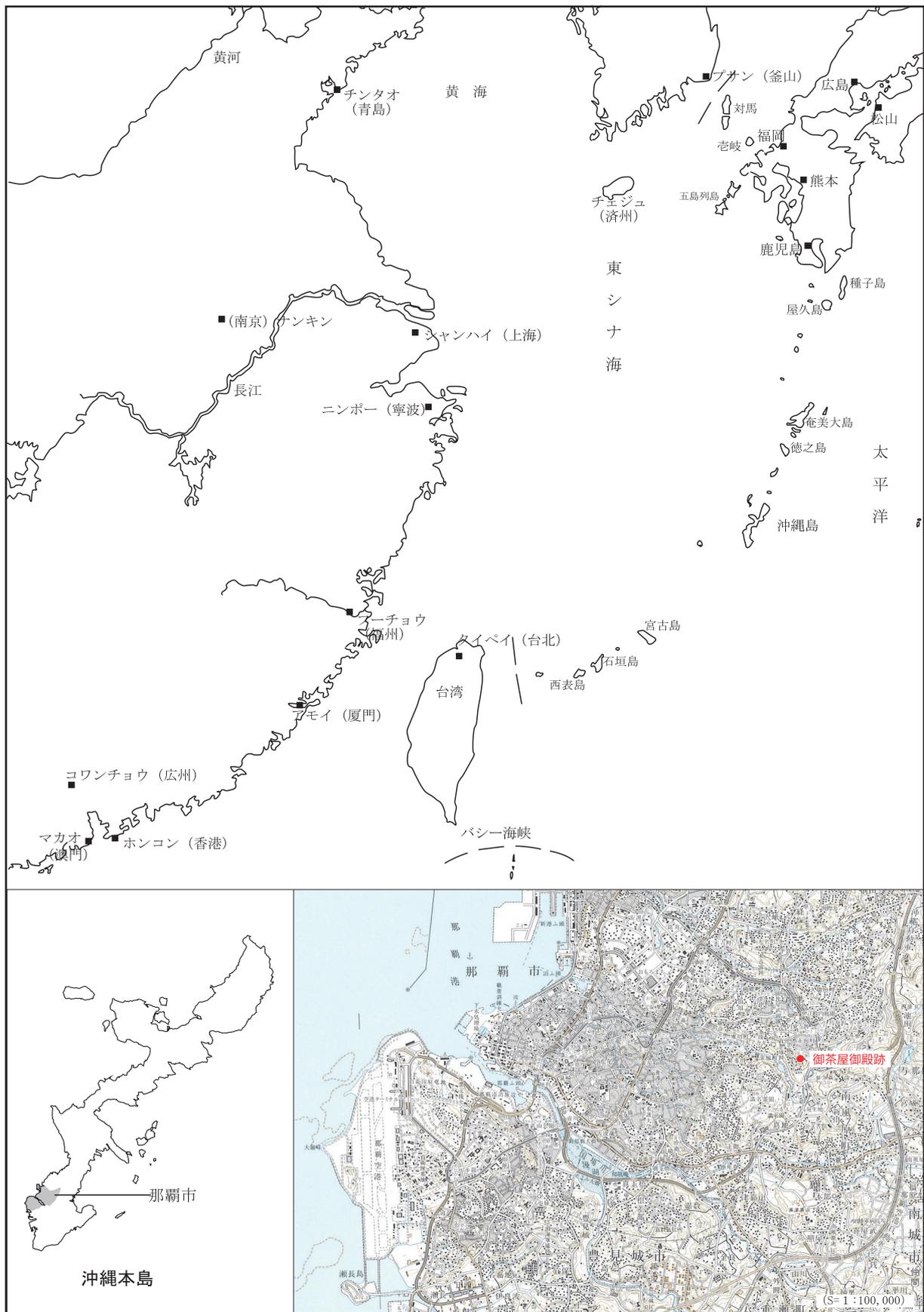
首里地区は首里台地と呼ばれる琉球石灰岩の台地に形成された町である。標高120~130mの丘陵部には琉球国王の居城である首里城が立地し、14世紀以降から王府時代の終末期までの永きにわたり王都として栄えていた。首里台地を形成する琉球石灰岩の下部には新第三紀の砂岩・泥岩からなる島尻層群が基盤層として広がっており、この島尻層群を不透水層として、琉球石灰岩との不整合部分からの湧水が各所で確認されている。そのため主値地区は湧水の豊富な地域であり、首里城内やその周辺に龍樋や金城大樋川などの湧泉が多数所在している。

その首里台地南東部の急崖上に崎山は位置する。崎山は樹林に覆われた丘陵部と、眼下を流れる安里川に沿う低地部とに大きく分かれ、東側には那覇市の最高所である弁ヶ嶽(標高165.7m)がそびえ、そこから連なる丘陵が北側を取り囲んでいる。今回の調査地は崎山の標高約130mの崎山の丘陵上に所在している(第2図)。

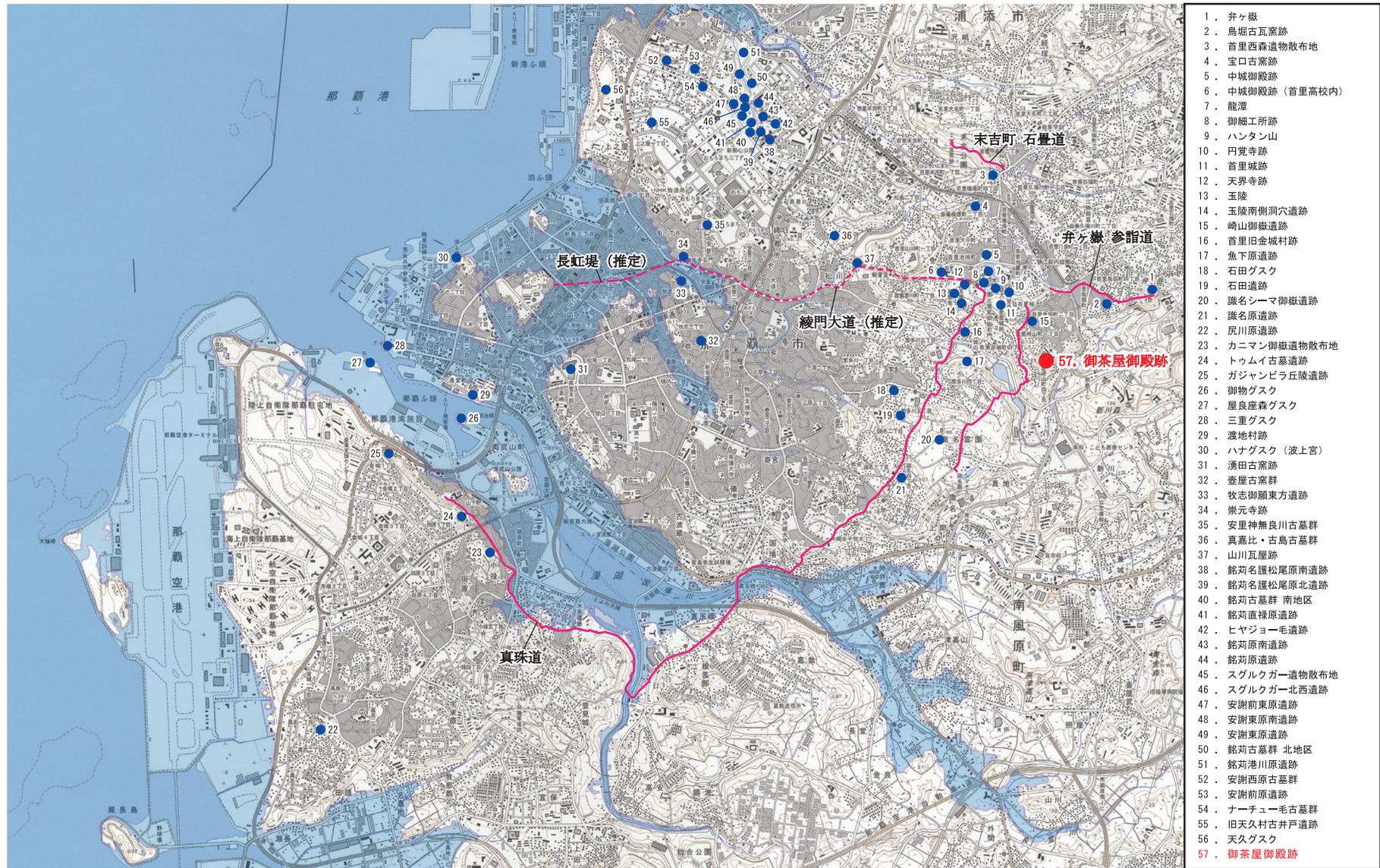
第2節 歴史的環境

首里崎山町は、琉球王国時代には崎山村として記録が所在している。首里古地図には東西の通りを軸として53の屋敷地が記載されているほか、田島なども確認することができる(第3図)。崎山の名称は、首里城及び赤田の先に当たる山が由来の説、首里台地東端に突き出た地形に由来する説などがある。首里城南東に接し、東の赤田村、鳥小堀村とともに首里三箇と呼称されており、古くから士庶の家が密集する首里地区有数の居住地であり、御茶屋御殿や建善寺、雨乞御嶽などが所在する崎山は首里の中でも特色ある地域であった。

かつてこの地にあった御茶屋御殿は、阿氏伊舎堂親方守浄を普請奉行に任じて1677(尚貞9)年の4月に着工し、翌月5月には竣工したとされている。北に浦添及び弁ヶ嶽、南に識名及び八重瀬岳、東に知念半島及び久高島、西に那覇及び慶良間諸島を望むことのでき



第1図 那覇市の位置と遺跡の位置



第2図 御茶屋御殿跡の位置及び周辺の遺跡（那覇市史1985, 新島2005に加筆・修正。 ■部分は概ね近世の海岸線）

(S=1:50,000)



第3図 首里古地図にみる御茶屋御殿跡及びその周辺

(首里古地図 沖縄県立図書館所蔵)



第4図 首里古地図にみる御茶屋御殿跡

(首里古地図(部分拡大) 沖縄県立図書館所蔵)

る中山第一の景勝地でもあった。この情景については、汪楫の「使琉球雑録」、徐葆光の「中山伝信録」、周煌の「琉球国志略」などの冊封使の記録が残されている。特に著名なものとしては名護親方の「東苑八景」が挙げられる。「東苑八景」は東海朝曦・西嶼流霞・南郊麦浪・北峯積翠・石洞獅蹲・雲亭龍涎・松径凌声・仁道月色の八題からなる漢詩で、前半の四首には御茶屋御殿から見る情景が、後半の四首には敷地内の様子が詠まれている。

御茶屋御殿の構造や様式については判然としないが、首里古地図からは、敷地の北と西は石垣で囲まれ、西側の道に面して門が設置されている。内部には北側の石垣近くに南面する建物が一棟、門と相対する建物が三棟確認でき、敷地の西半分には空間が広がる。三棟の建物の後背には築山らしきものがあり、その東側にはさらに二棟の建物が確認できる(第4図)。

また御茶屋御殿は、王家の別邸であるとともに、国賓の歓待にも使用された施設であった。1800(尚温6)年に来琉した冊封使李鼎元の「使琉球記」からは、国賓のための宴を行う場は天使館及び首里城で、宴とは別に一席を設ける場は御茶屋御殿で、用途による使い分けがなされており、識名園造設後も御茶屋御殿が利用されていたことなどが窺える。山内親方の記した「御茶屋御殿諸芸つくし」や豊川親方の雅文である「於御茶屋諸芸づくしの時」には、詩歌・管弦の催しや茶道・生花・武道・囲碁などの様々な芸能が披露された様子が記されている。また吉屋思鶴の作と伝えられる「拝で拝んぶしゃ首里天加那志 遊で浮ちやがゆる御茶屋御殿」の歌からは、琉球王国時代、御茶屋御殿という施設が非常に有名であり、かつ庶民の憧れとしてとらえられていたことが理解される。

明治時代以降、廃藩置県により琉球国王の東京への移動に伴い、尚泰王代まで使用された御茶屋御殿は首里城とともにその役割を失った。首里城は熊本鎮台沖繩分遣隊の兵舎や、首里市立女子工芸学校・沖縄県立工業徒弟学校・首里城第一尋常小学校の校舎などとして利用されたが、ほとんどの施設は手つかずの状態に放置され、荒廃の一途を辿っていった。御茶屋御殿も例に漏れず、1882(明治15)年に来沖した尾崎三良の日記には、「廃藩旧王東京に移りしより以来これを修理するものなし。庭園荊棘蘆階を没し、鼠糞散漫、客襟の滋を覚え、顧れば悲風飄々たり、夏日尚冷気を覚う」と記されるほど、この頃には老朽化が進み廢墟と化していた。北側に広がる樹林は開墾されて農耕地となっており、1898(明治31)年には隣接する崎山御殿も民間に払い下げられた。しかし当時の文部省文部技官であった阪田良之進の尽力により、1930(昭和5)年に首里城正殿とともに御茶屋御殿の改修工事が実施され、往時の姿を再現するまでになった。ただ御茶屋御殿に関しては敷地内の建物全ての建物が修復されたのではなく、対象となったのは茶亭、茶亭に伴う離れの厠、管理人の生活する御番屋の3棟のみであった。それでも田辺泰が「規模結構はともに比較にならぬが、南苑を桂離宮に例えるならば、東苑は修学院離宮に模すべきものであろう」と称したように、御茶屋御殿は戦災で焼失するまでの間、旧国宝の第一候補として偉容を誇っていたようである。

その後、沖縄全土は第二次世界大戦により壊滅的な被害を受け、首里城をはじめとする

貴重な文化財もことごとく灰燼に帰した。首里一帯は戦後しばらく立ち入りが禁じられ、ようやく人々が帰住し始めたのは 1945（昭和 20）年 12 月からであった。御茶屋御殿も他の文化財と同様に建物は完全に破壊され、敷地内は旧状を留めない状態にまで変貌した。跡地は戦後、一時期は首里及び沖縄各地で収容された遺骨の集積所となっていたが、1952（昭和 27）年に尚家からカトリック教会に払い下げられた。その後は同年 12 月の仮御堂の設置を皮切りに司祭館や学生館、1956（昭和 31）年に教会の本会堂、1959（昭和 34）年に教会付属の幼稚園が相次いで建設された。また時期は前後するが、1946（昭和 21）年には北側の菜園跡に城南小学校が建設されるなど、御茶屋御殿の跡地及びその周辺は大きく様相を変えて、現在に至っている。なお、東苑八景で石洞獅蹲として登場する石造獅子は、先の戦争で破壊されたが、現在は修復されており那覇市指定の有形民俗文化財となっている。

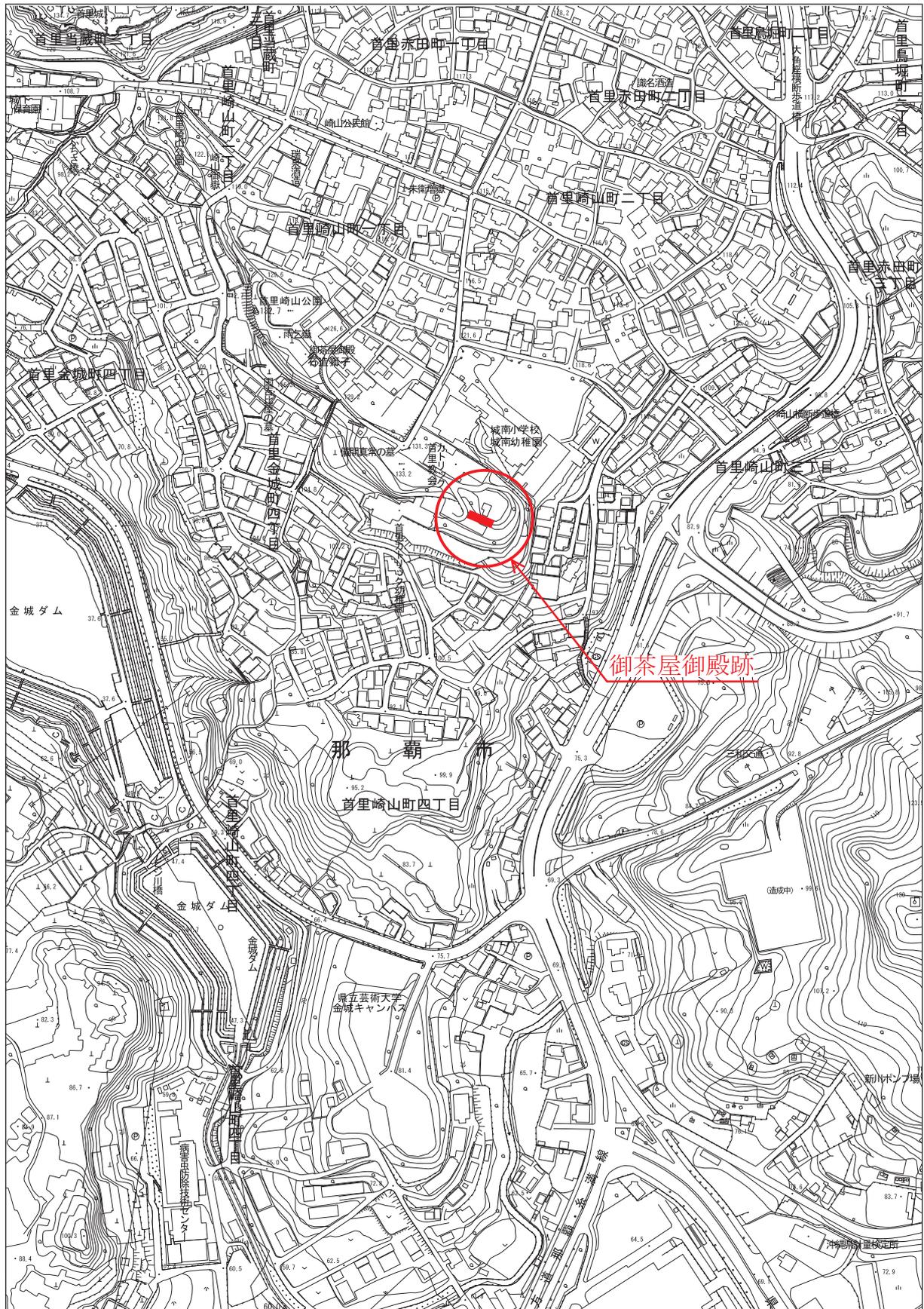
第Ⅲ章 調査経過と調査組織

第 1 節 調査経過

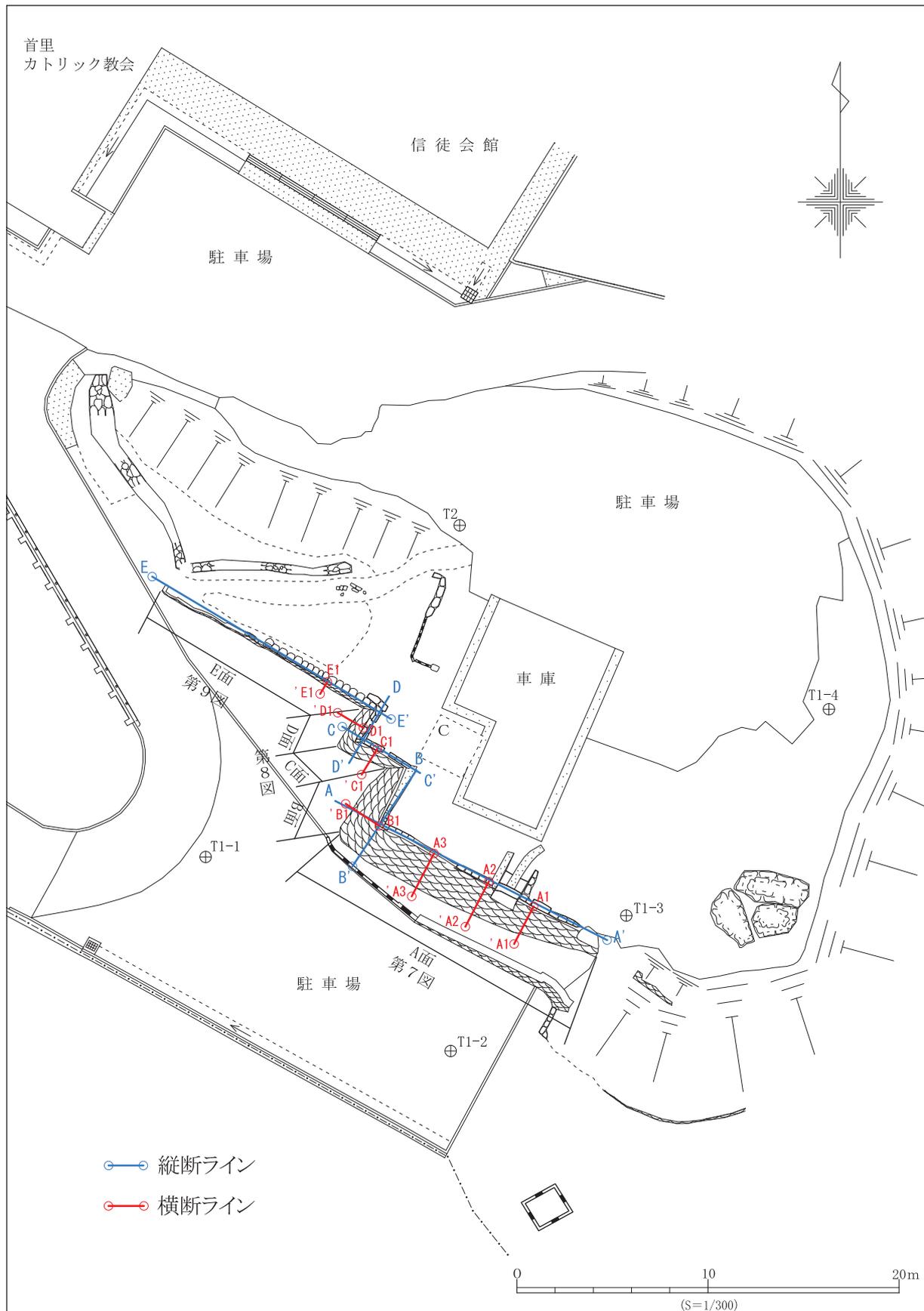
調査は 2017(平成 28)年 7 月から 2018(平成 29)年 1 月までの期間で実施した（第 1 表）。調査に先立ち、宗教法人カトリック沖縄教区、宗教法人首里カトリック教会ならびに学校法人カトリック学園首里カトリック幼稚園への調査協力を依頼したのち、株式会社琉球サーベイが調査を実施し、調査監督を那覇市市民文化部文化財課がおこなった。現状確認を目的とした調査であるため、石垣の表面精査および平面・断面実測・図面作成業務を主な作業とした。

第 1 表 調査工程

工程 \ 年度	2016 年度 (平成 28 年度)	2017 年度 (平成 29 年度)
測量調査	→	
資料整理		→
報告書作成		→



第5図 調査区位置図



第6図 調査区平面図

2017(平成 28)年 8 月 3 日

現場作業前の計画準備をおこなう。

2017(平成 28)年 8 月 22 日 ～ 2017(平成 28)年 8 月 26 日

草木伐採清掃作業をおこなう。

2017(平成 28)年 8 月 29 日

基準点測量をおこなう。

2017(平成 28)年 8 月 30 日 ～ 2017(平成 28)年 9 月 16 日

計測写真撮影作業をおこなう。

2017(平成 28)年 8 月 25 日 ～ 2017(平成 28)年 12 月 22 日

図化編集作業をおこなう。

2017(平成 28)年 12 月 26 日

レーザー測量調査作業をおこなう。

2017(平成 28)年 12 月 27 日 ～ 2018(平成 29)年 1 月 20 日

点群データ処理・点群動画編集作業をおこなう。全ての作業を終了。

第2節 調査組織

調査は2016(平成28)年度に那覇市市民文化部文化財課の監督の下で株式会社琉球サーベイが実施し、資料整理および報告書作成は2017(平成29)年度に那覇市市民文化部文化財課が実施した。本調査の調査組織は次の通りである。

事業主体	那覇市	市長	城間 幹子	
	市民文化部	部長	玉寄 隆雄	(平成28年)
	市民文化部	部長	徳盛 仁	(平成29年)
	市民文化部	副部長	渡慶次 一司	
事業所管	文化財課	課長	岸本 修	
調査総括	文化財課	副参事	島 弘	
調査事務	文化財課	副参事	島 弘	
	〃	主幹	内間 靖	
	〃	主査	神谷 あけみ	
	〃	主任主事	高嶺 朝美	
	〃	主幹	根路銘 敦子	
	〃	主査	長嶺 盛孝	
	〃	主任主事	大田 成子	
	〃	主任学芸員	伊集 守道	(平成28年)
	〃	主事	日高 一十三	
	〃	技師	上原 俊彦	
	〃	学芸員	鈴木 悠	(平成29年)
	〃	主事	立住 育也	(平成28年：臨時職員)
	〃	文化財専任主事	野原 巴	(平成28年)
	〃	〃	立住 育也	(平成29年)
	〃	主事	森下 愛子	(平成29年：臨時職員)
	〃	歴史博物館グループ・壺屋焼物博物館グループ		
調査担当	文化財課	副参事	島 弘	
	〃	主幹	内間 靖	
	〃	専門員主査	玉城 安明	
	〃	〃	仲宗根 啓	

〃	主任専門員	樋口 麻子	
〃	〃	當銘 由嗣	
〃	主任学芸員	安齋 真知子	
〃	学芸員	吉田 健太	
〃	非常勤専門員	徳元 剛	
〃	〃	長濱 愛梨	(平成 28 年)
〃	〃	牧山 美緒	(平成 28 年)
〃	〃	玉城 真紀子	(平成 28 年)
〃	〃	江上 輝	
〃	〃	渡辺 幸夫	(平成 29 年)
〃	〃	砂川 暁洸	(平成 29 年)
〃	〃	阿部 直子	(平成 29 年)

測量調査

株式会社琉球サーベイ

代表取締役	大濱 正之
主任調査員	金武 正紀
調査補助員	比嘉 万友美
測量技師	後神村 純史郎
施工管理技士	上原 一彦
技術管理職員	上江田 晋作

資料整理

文化財課

〃

〃

資料整理員	真栄城 和美
〃	石原 愛子
副資料整理員	田川 恵美

第IV章 遺構

本調査は石積が残存している範囲（約 210 m²）を調査区として設定した。草木伐採清掃作業をおこなったところ、石積は鉤状に配置されていることから、各面をA・B・C・D・E面と設定し、各面の立面、縦断面、横断面の現況の測量調査を実施した（第6図）。

石積A面については南東側の石積最上段が標高約 131.5m、北西側の石積最下段が標高約 128.0mであった（第7図）。石積最下段から最上段にかけて約 60度の傾斜を持つ。石積の残存状態は比較的良好である。ただし南東端および中央部から北西端にかけて樹木の根が張っており、石積裏側まで入り込んでいる状態である。また一部はコンクリート等で覆われたりしている箇所も見られる。

石積B面については北側の石積最上段が標高約 131.0m、南側の石積最下段が標高約 127.7mであった（第8図）。石積最下段から最上段にかけて約 61度の傾斜を持つ。石積中央に樹木の根が張っており、石積裏側まで入り込んでいる状態である。その影響か石積に若干の崩れがみられる。また石積最上部はコンクリート等で覆われている箇所も見られる。石積下部の残存状態は比較的良好である。

石積C面については南東側の石積最上段が標高約 131.1m、北西側の石積最下段が標高約 128.3mであった（第8図）。石積最下段から最上段にかけて約 74度の傾斜を持つ。石積の残存状態は比較的良好である。ただし北西端上部において樹木の根が張っており、石積裏側まで入り込んでいる状態である。また石積上部はコンクリート等で覆われたりしている箇所も見られる。

石積D面については北側の石積最上段が標高約 131.0m、南側の石積最下段が標高約 128.3mであった（第8図）。石積最下段から最上段にかけて約 73度の傾斜を持つ。石積最上面には樹木の根が石積に張っている状態である。樹木の張り出しの影響か石積に若干の崩れがみられるが、石積南側の残存状態は比較的良好である。

石積E面については南東側の石積最上段が標高約 130.1m、石積最下段が標高約 129.1mであった（第9図）。石積最下段から最上段にかけて約 83度の傾斜を持つ。石積の残存状態は比較的良好である。ただし石積二カ所において樹木の根が張っており、石積裏側まで入り込んでいる状態である。また一部はコンクリート等で覆われたりしている箇所も見られる。

対象とした石積全体は、長さ約 31.5m、幅約 2.0mを測り、北西から南東を通る。石垣に使用されている石材は琉球石灰岩や細粒砂岩（方言でニービ）などが用いられる。石積最下段～1.5mにかけて幅 50cmほどの多角形の石をさまざまに変形させながら組み上げている。1.5m～2.5mにかけては幅約 30cmほどの比較的小さめの石を組み合わせて積み上げており、最上段は方形の切石およびモルタルなどで積み上げられている。また各面の端部におよび最上部においては方形に加工された比較的大きめの石を積み上げている。

第V章 まとめ

御茶屋御殿跡は、那覇市首里崎山町4丁目60番地に所在する庭園跡である。本調査は、敷地内で比較的良好に残存しているとされる南側石積を対象にしておこなった。調査をおこなった石積のすぐ北側には、沖縄県立埋蔵文化財センターの発掘調査により、茶亭跡に相当する建物跡や御茶屋御殿造営以前のものと想定される石列遺構などが検出されており、石積は上記の遺構との関連が考えられる。

石積は、主に琉球石灰岩を用いて構築されている。また県内では高さ2mを超える城壁等の場合、背面地盤からの様々な作用応力に耐えうる構造でなければならないため、勾配は60度から80度と、緩やかに設定している事例が多くみられる。今回調査対象となった石積も、60度から80度の勾配となっており、その例外には当てはまらない。

石積の積み方は、主に石を多角形に加工し互いに噛み合うように積むあいかた積みと呼ばれる技法を用いている。積まれている石は、地表から1.5mまでが一辺約50cmの石灰岩が用いられており、1.5mから石積頂部では一辺約20cmの石が用いられている。経年劣化によるものか石積の間隔に若干の空隙がある。ただし各面と接する角部分やE面には、方形の石を用いて構築されている荒い布積みの技法を用いている。E面については積み方や勾配などを考慮して、他の面の石積みと若干の性格の差異がみられる。

積み方を併用している構築物としては、近隣地に所在するヒジ川橋の構造と類似する。ヒジ川橋は御茶屋御殿から識名園に至る途中に金城川に17世紀半ばまでに架けられた橋であり、橋脚部を布積み、その他の部分はあいかた積みを用いて作られている。記録によれば、御茶屋御殿が1677年に造られていることから同時期の構築物であると考えられる。

またE面石垣の複数の最上部の石において、方形の浅い溝が確認された。この方形の溝はヒジ川橋などで欄干を柄穴に類似する。そのことより、最上部の石で確認された方形の浅い溝は柄穴と考えられ、欄干が設置されていた可能性が示唆される。

首里崎山町は古くから士庶の家が密集する居住地であり、多くの史跡が現在も残る歴史深い地域である。今後も調査を継続していくことにより、往時の崎山の様相が明らかになっていくだろう。

図 版



図版 1 石積 A 面の状況
上段：石積 A 面の状況（南西から）
下段：石積 A 面の状況（南から）



図版2 石積B・C面の状況
上段：石積B面の状況（西から）
下段：石積C面の状況（南から）



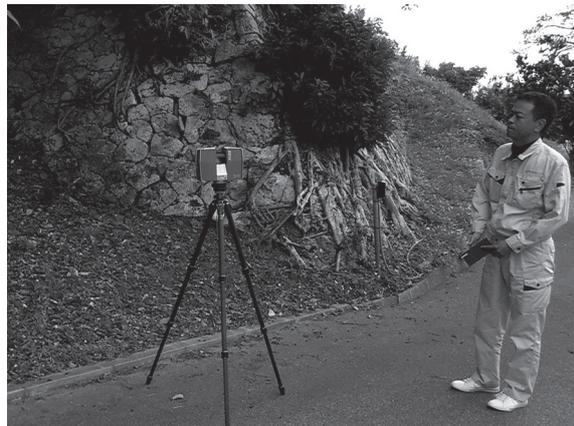
図版3 石積D・E面の状況
上段：石積D面の状況（西から）
下段：石積E面の状況（南から）



図版4 調査作業の状況

- 1 段目左：調査区作業前近景（西側）
- 2 段目左：調査区作業前近景（東側）
- 3 段目左：伐採・清掃作業
- 4 段目左：測量作業状況

- 1 段目右：調査区作業前遠景
- 2 段目右：作業前打合せ状況
- 3 段目右：伐採・清掃作業
- 4 段目右：測量作業状況



図版5 調査作業の状況

1 段目左：撮影作業状況

2 段目左：写真測量作業状況

3 段目左：石積測量作業状況

4 段目左：柄穴確認状況（西から）

1 段目右：写真測量作業状況

2 段目右：石積測量作業状況

3 段目右：レーザー測量作業状況

4 段目右：柄穴確認状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	なはしないいせき							
書名	那覇市内遺跡 VII							
副書名	首里旧金城村跡・御茶屋御殿跡							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第106集							
編著者名	玉城安明・吉田健太							
編集機関	那覇市市民文化部文化財課							
所在地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 TEL 098-917-3501							
発行年月日	2018（平成30）年 2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゅり 首里 きゅうかなぐすくむらあと 旧金城村跡	おきなわけん なはし 沖縄県 那覇市 しゅり きんじょうちょう 首里 金城町 3丁目21-5番地	47201		26度 12分 57秒	127度 42分 57秒	2006. 9. 14 ～ 2006. 9. 22	約6㎡	個人住宅建設 工事に伴う 緊急発掘調査
うちややうどうんあと 御茶屋御殿跡	おきなわけん なはし 沖縄県 那覇市 しゅり さきやまちょう 首里 崎山町 4丁目60番地	47201		26度 12分 23秒	127度 43分 22秒	2016. 7 ～ 2017. 1	約210㎡	現状把握
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
首里 旧金城村跡	集落	中世～近世		ピット群	青磁 青花 褐釉陶器	遺物包含層の堆積と遺構 (柱穴) が検出された		
御茶屋御殿跡	庭園	近世 近代		石積		御茶屋御殿敷地内に所在 した茶亭跡南側石積の現 状把握		

那覇市文化財調査報告書第 106 集

那覇市内遺跡Ⅶ

—首里旧金城村跡—

—御茶屋御殿跡—

発行 2018（平成 30）年 2 月 28 日

那覇市

〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎 1-1-1

編集 那覇市市民文化部文化財課

T E L 098-917-3501

F A X 098-917-3523

印刷 有限会社 文成印刷

〒902-0073 沖縄県那覇市上間 364 番地

T E L 098-834-7143

F A X 098-855-2533